

The Iris Murdoch Newsletter of Japan



特別号

February, 1999

Dame Iris Murdoch(79歳)の死去(1999年2月8日)を悼む

哀悼 --- デイム・アイリス・マードック

会長 室谷洋三

日本アイリス・マードック学会が発足したのは昨年末のことでした。デイム・アイリス・マードックは1996年以来アルツハイマー症を患って記憶力、思考力は衰弱していたものの身体的にはそれほど衰えをみせていないと伺っていました。そこで私達は今年7月には満80歳をむかえられるものと確信しつつ学会設立に向けて検討を重ねてきました。そして多くの人々の熱意と尽力の結果、実現の運びとなったのでした。マードックご夫妻にこのことをお知らせしましたところ、夫のジョン・ベイリー教授から次のような一節を含む丁寧なお手紙を頂きました。(次号に全文が掲載される予定です)

---and it gives me great pleasure that all she(=Iris) has done in more than fifty years of a great career as writer and philosopher is now being honoured by the foundation of the Iris Murdoch Society, and especially of the Iris Murdoch Society of Japan ---- Most warmly do I wish the Society well; and I know that Iris - modest as she is and always has been about her achievement - would do the same. ---

それから1ヶ月も経たない2月9日(イギリスでは8日)早朝、電話のベルが響き、偉大な作家の死を告げられたのは大きな衝撃でした。暫くは呆然とするばかりでしたが、やがてこれから何をしなければならないかが判ってきました。

デイム・アイリス・マードックは葬儀も追悼の催しも一切行わないで欲しいと言い残していたそうです。私達がこの際すべきことは彼女の作品を読み直すことであり、学会としては9月下旬に予定している総会・研究発表を実りあるものにする事です。そしてそうすることがデイム・アイリスの遺志に最も適うことと思います。改めて会員の方々の積極的なご参加をお願い申し上げます。

★以下の情報は The Times と The Sunday Times による

文学界からのマードックの御霊に捧げる哀悼の詞

MurdochはOxfordの介護施設で夫のBayley

教授に看取られて安らかに息を引き取った。小説家でしかも哲学者としての彼女は人間の心理を鋭く洞察する作品を描き、20世紀屈指の文筆家であった。その作品は21世紀以降も読み続けられるだろう。昨夏Bayley教授はMurdochの回顧録を出版し、その中で病により二人の間は想像以上に穏やかになったと述べている。彼女は、Josephine Hartによると最も優美な人であり、John Griggに言わせると知性と暖かい心を兼ね備えた人である。またDoris Lessingは「何と惜しい人を失ったことか」と嘆き、Margaret Drabbleは珍しく優れた力量の持ち主とほめ、Malcom Bradburyは今世紀後半におけるイギリス最高の作家と称して賞賛の辞を惜しまない。(Feb. 9 1999)

広い視野を持ち、多くのことに関心を抱き続けたアイリス・マードック逝く 小説家にして哲学者アイリス・マードックの生涯が、彼女の死の翌日掲載された。両親との生活、サルトルとの出会い、運命的な結婚、同志の如く支え合った結婚生活……。エピソードの多くは、読者にとって決して目新しいものではないが、閉ざされた世界に留まることを潔しとせず、より高い理想を目指し著作活動に励んだ作家の姿を改めて思い起こさせる。

マードックは多作な作家であった。多作を批判する人は、作家が抱き続けた信念を見過ごしている。すなわち、善の思想同様、彼女にとって完全な作品というものは存在せず、一作生み出すごとに、さらなる理想の世界が作家の目の前には広がっていたのである。(Feb. 9 1999)

開かれた心の持ち主、哲学的語り部アイリス・マードックを悼む 哲学者、小説家のマードックが才能を惜しまれながら世を去った。彼女は特異な才能で哲学的探求を小説の形式で表現する分野を切り開いた。それは人間の意識を扱う最高の芸術で、その業績は大きい。「善とは何か」「芸術とは何か」という哲学的命題を小説や評論に表した。その中には中世の日本に題材を取った『三本の矢』という珍しい戯曲もある。彼女は夫Bayley氏との穏やかな生活にも、鋭敏で闊達な精神生活を送り、あらゆる事に強い好奇心を持ち人間に対する暖かい眼差しを注いでいた。知的活動を旨とする彼女が皮肉にも脳の病に倒れたのは心痛む限りである。彼女の死は大きな損失だが偉大な作品は我々のもとに残されている。(Feb. 9 1999)

葬儀を望まず マードックは葬儀その他一切不要であると明確に言い残していた。名声に無頓着で控えめだった彼女らしいと、彼女の著作の出版担当者はいう。今世紀最大の作家の一人であった彼女の訃報に、改めてその作品が目ざされ著作の売上が伸びそうだ。15年来の友人で遺著管理人でもあるヴィクター氏によると未発表作品はない模様で、たとえあっても「彼女が発表を望まなかったのなら、いまさらするべきではない」と彼はいう。彼女にノーベル賞が与えられなかったことを彼は非常に残念がっている。事務的連絡にさえ感謝の言葉を書き添えるほど筆まめだった彼女は、膨大な量の書簡を残しているがまだ発表の段階にない。葬儀一切を望まない場合、直接火葬場に運ばれ、遺灰は人知れず撒かれる可能性がある。(Feb. 10 1999)

★マードック学会よりのお悔やみ状

Dear Professor Bayley,

Hearing of the loss of Dame Iris Murdoch, we, members of Iris Murdoch Society of Japan, express our sincere condolences to Professor John Bayley.

We were deeply touched by her gentle smile and thoughtful words, when both of you visited Kobe and Okayama in 1992. We can no longer see her, but her works will surely last forever and we will be able to see her whenever we read them.

We know you nursed her devotedly throughout her illness, and we hope you recover very soon from the sadness. May she rest in peace.

Yours Sincerely,

Secretaries of

Iris Murdoch Society of Japan

The Iris Murdoch Newsletter of Japan	特別号	発行者; 日本アイリス・マードック学会
代表; 室谷 洋三	編集; 駒沢 礼子	事務局; 川崎医療福祉大学 橋本信子研究室
〒701-0193 岡山県倉敷市松島288	TEL 086-462-1111	FAX 086-464-1109